第３章　地図編―四万十の森を歩く

高知県の森林率は日本一の 84%。中山間地域が多くを占める四万十町も森や木とともに暮らしてきた地域である。山々の木はヒノキやスギといった人工林が主体だが、アカガシやシイ、カシといった天然林が残っている森もある。山や森には多くの自然が残り、人々の営みの中で生まれた民話や史跡が残っている。本章では、これら人の暮らしが息づく生き生きとした四万十の森や地域の様子を記録した手描きの町歩きマップを紹介する。

高知県展の特選作家でもある森下画伯の個展

１、はじめに

イラストマップを描き始めたきっかけは、梼原町松原に住んでいた時代に（2003～2010）久保谷森林セラピーロードを地域みんなで整備して、モニターツアーなどを開催したりしながら取り組みを始めた時に重なる。思いつきでセラピーロードの散策マップを制作したことが意外と好評を得て、根っからのお調子者なのでそのことが嬉しくなり、また「マップ」という表現方法がおもしろくなったことがスタート地点となっている。それから身近にあった久保谷山風景林や鷹取山保護林など、山に関する方向に向かい、それぞれの山が持つ豊かさやおもしろさ、森林に関する豆知識等を、マップを読んだ人に知ってもらえるよう織り込んでいった。

それ以降、足の向くまま、気の向くまま、山々や山間地域の集落を歩くようになり、今に至っている。その中で大事にしていることは、出会った人たちにお聞きしたその地域の歴史やいわれ、伝承、民話、そして往還道などのこと。山間地域では恐ろしいほどに人口流出と高齢化が進んでいる。今、書き記しておかなければどんどん消滅してしまうこれらの貴重な生きた人の口から生で聞いた話を、「紙」に記しておけば、もしかして次の時代に残っていくかもしれないという淡い期待がある。歩いていて、偶然出会い、温もりを感じながら聞けた話はいつまでも心に残る。そんなときは巡り合わせの不思議や何かの縁。そんなことを感じる瞬間である。

描くときに気にかけていることは、これらお伺いした人の言葉は極力残したいということと、地域に伝わっている民話や伝説があれば文献等も参考にしながら拾い集めることで、さらに彩りを添えることができると思っている。また、諸事においてそこに暮らした人々。例えば石垣を積んでいった人。往還の整備をしていた人。山と雲を見ていた人など、庶民を主人公においた目線で記したいと思っている。マップを作るときに、まず言葉が出てこないといっこうに進まない。特に、山で出会った人の話や、思い入れのある山行になった山などは、どのような言葉でどんなエピソードを書くか、この点にとても神経を使うので、何ヶ月も机の上に置いたままにして進まないマップもある。

歩いただけでお蔵入りになっている山もある。完璧にできない私の弱さである。心配なのは、私が歩いた奥山へこの地図を頼りに登山に行って迷ったりしないだろうかということが気がかりである。最近では特に慎重を要する山には注意を促す一文を入れたりしている。

この地図の制作について、まずケント紙に 6B 鉛筆で下書きをしてペン（ユニシグノを愛用）を入れ、それを窪川の文具店「リュウビ」で再びケント紙にコピーをして滲まないよう処理し、主に水彩絵の具で彩色をしている。

ポイント地点等は蛍光ペン、赤い実線は車道や林道、赤い破線は歩いた道を基本にしている。一部そぐわないものもあるがだいたいこのスタイルで制作している。この地図を読む方には、山の魅力、その山の伝承、人々との関わりなどを知ってもらい、山や森林、山間地域の集落等のことに少しでも関心を持ってもらえれば幸いである。

松葉川山登山（四万十町）

２、霊峰五在所の森

窪川のシンボル

佐賀温泉のある黒潮町橘川よりみる五在所森の姿はとても秀麗であり、ぐっとそびえるその山容は威厳すら感じさせる。五在所の森に初めて登ったのは確か 2000 年くらいの初日の出登山だった。武内文治さんをリーダーに、大正町の山仲間と夜明け前から登りはじめ、山頂で太平洋から登ってくる新年のご来光を拝んだことである。

その後、平成２２年に窪川勤務となり、俄然この山が身近になる。四万十町観光協会主催で毎年ＧＷに登山イベント付が計画されたり、登山道脇には小学生の名前が書かれた杭が立てられていたり、町内にはこの山を讃える大きな看板があったり、窪川地域のシンボル的山であったことを知る。

五在所山の由来には、弘法大師伝説や役行者伝説など、古来より霊山として崇められ、信仰の山として人々に親しまれてきた歴史がある。五つの在所（人里　窪川、若井、市野瀬、金上野・見付、口神・井細）が見渡せることから名付けられたという説をはじめ、五という数字との関わりにおいて、五社神社にまつわる伝説、そして五つの仏をご本尊とする岩本寺へとつながる物語。1300 年前の当時に思いをはせつつ登るのもおもしろい。山頂には天文測量のための「天測点」（全国 48 カ所。高知県ではここだけ）や一等三角点（四万十町には五在所森と城戸木森の２カ所）が設置されており、地理天文においても重要な山であることがうかがわれる。

また、第二次世界大戦の折には米軍機を迎撃する哨戒所のあとや 1846 年に奉納された手水鉢など、歴史を肌で感じることができる。何よりも、足摺岬から室戸岬まで太平洋を望むスケールの大きな眺望は魅力満点である。

山頂より見付方面に続く森の道も、その昔は佐賀と興津・見付･東又方面を結ぶ往還道であった。見付側には弘法大師が庵を結んだ弘法庵跡もある（場所は特定できないが、たぶんここだ！という場所がある）。注意点としては、興津方面に下りていく尾根に簡単に迷い込むこと。指導標も整備されていないので慣れた人と行くことをおすすめする。太平洋の潮風と陽光を受けて輝く照葉樹林を歩くとき、いにしえの人々の足音が聞こえてきそうである。

五在所山のある金上野集落を描いた絵図〈個人蔵〉

霊峰 五在所の森
五在所の森
窪川 金上野と佐賀市野瀬にそびえる標高658.mの山。古来より霊山・信仰の山として人々に親しまれ崇められています。古くは清浄無垢の山で不浄の者の入山は禁じられる程の霊峰であり、この為五在所森～大谷山一帯は山伏や弘法大師にまつわる伝説や不思議な物語が数多く残されています。その一つ"今からおよそ1300年の昔、「役の小角」という行者が、この山で国家鎮護の護摩修法を執り行った際、五社の瑞鳥が舞い降り藤井森(五社)に現れた。
弘法大師はこの五羽の瑞鳥を仁井田大明神の化身と崇め一つの社宮であったものを五つに分け祀り、神仏混淆の「藤井山 五智徳院 福円法寺」を創建し八ヶ所の社殿の礼所とした。と伝えられています。(三十七番札所のルーツは五社であった)
また、山頂からは五つの在所(人里)が見渡せる峰であることから「五在所の峰」ともいわれています。
このように時代は変遷しても、五在所の森は"霊峰"として今でも変わることなく窪川の里を護り続けています。
((林一将記「五在所の森とその物語」より))
610
大谷山
大谷山・見付方面への往還道 途中で道がとぎれている為、通行不可。(末整備)
窪川方面一室戸鉄道
657.96m
河
四国カルスト
オ一次大戦中の米軍対哨戒所跡
山伏修業場跡 大岩
大いスノキ2本の根元に祠がある。
(1846年) 弘化三年寄進のちょうず鉢
五在所山
金上野のせいさんとまやたさんの二人の力自慢が、力比べを兼ねて担ぎ上げたと伝えられている。この手水鉢を人力で担ぎ上げた若の人の五輪の強靭さには みなれいります。
展望 哨戒所跡
230 祠 90m 山頂
大谷山
あと500
なだらか
カロウト越山
瑞鳥
めでたいことの前兆に現れる鳥。
鶴・鳳凰など、五在所伝説の五鳥は 孔雀・白鷺・雉子・鳩・鶺鴒 等といわれる。
室戸
佐賀
窪川
山頂 五在所森
大谷山
麓から見て右上ちょうどあたりが哨戒所跡(窪川～大野間)
森林には心身をリフレッシュする健康増進効果があります
モリザーレはスパッツをはく
自然か人造か!?人像箱画岩」
巨岩を覆いアカガシ
"女の執念岩をも砕く"看板
佐賀橋川あたりから見える五在所森の姿は特に雄麗!!
太平洋見える。佐賀・市野瀬
市野瀬
ユズリハ
頂上まで500m
山頂には一等三角点と日本に48点ある天測点がある。
『天測点』
○天文測量のため S26～S33年の5月間に全国で48点設置され高知県では五在所森が設置されている。
(1辺22cmの8角形の柱)
また一等三角点も設置されており四万十町には城戸本森と2箇所ある。
(1辺18cmの四角形)
木もれ日を反射してキラキラと光輝く
照葉樹林のトンネルを歩く
ウネにある石標は国有林境界標
天然林
二又に分かれるがすぐに一本に戻るので安心
ヒノキ人工林
○登山口までは林道を約300m。
○登山口より頂上まで約1,500m。
○頂上より祠～90m
○ 〃 哨戒所跡～230m
アカガシ
ヤブツバキ
ボケノキ
ハイノキ
カゴノキ
ムロノキ
ヒノキ
アセビ
約500m
ヒサカキ
ツクバネウツギ
ヤブニッケイ
※下りは落葉ですべるし ヒザへの負担も大きい。小集団に
いきなり急な階段
炭素固定の看板
山小屋
登山口
ゲート
大観山峰看板
頂上 (270m)
天観堂
登山コースイメージ図
2011 国際森林年
四万十森林管理署

３、五社街道

信仰の原点

このマップは、窪川の魅力を再発見し、観光客に来てもらうためのコースを選定して当時観光協会にお勤めされていた牧野さんと資料を集めたり、取材をしたりして描いていった。またこのコースを「四万十あちこちたんね隊」の池田十三生隊長たちとお客様をご案内した懐かしい作品の一つだ。

個人的で恐縮だが、就職してわずかの頃、五社（四万十町仕出原・高岡神社）に詣でる前に身を清め払うという払川の奥の国有林現場で生産製品事業が展開されており、その現場で先輩たちと働いていた。集材機やチェンソーがうなりを上げ、スギ、ヒノキの銘木が搬出されていた。あの頃の山の賑わいがこれまた懐かしい。

飛行機を格納した壕の跡（宮内柳ノ川）

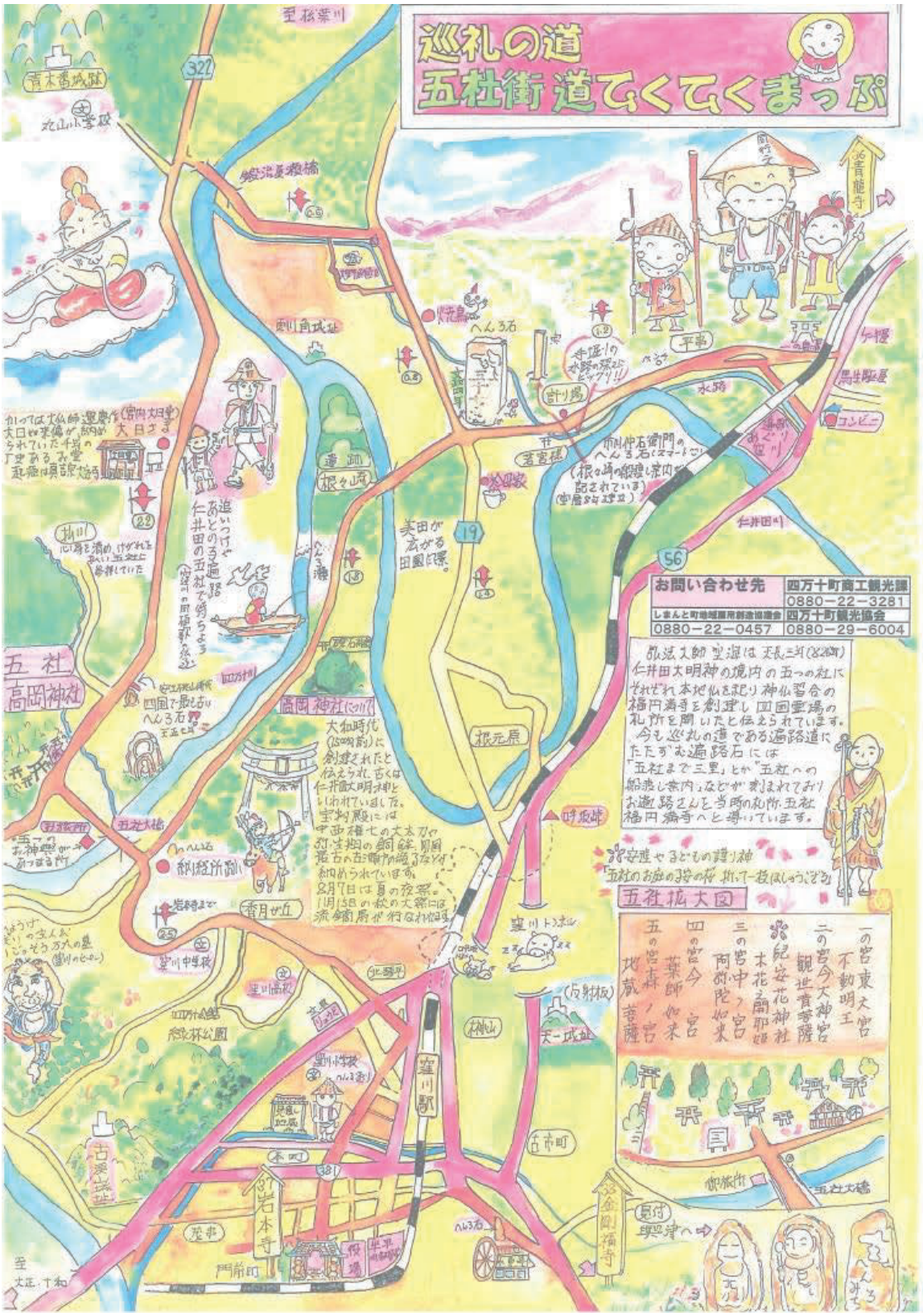
さて、四万十町にいながら知らないことだらけ。特にこのマップの範囲には古代から近代までの幾層にも重なる地層のように文化が残っている。遍路にフォーカスした内容なのですべてを紹介できていないが、古くは根々崎の石器遺跡。弥生時代の銅鉾が出土。弘法大師の足跡、戦国時代にはこの場で豪族同士が幾度も対峙して合戦があり、中西権七が奉納した大太刀が宝物として現存している。江戸時代では土佐藩執政・野中兼山による用水路の開設、土佐山内氏居城であった古渓城、庶民では窪川の愛すべきどくれもん「万六」の墓。第二次世界大戦中には海軍の飛行場もあって多くの国民が勤労奉仕に従事している。

様々な出来事、年代が毎春、土が降るたびに少しずつ埋もれ、川の氾濫があるたびに大きく姿を変え、地形も地名もゆっくりと変化し続けている。日ごろ、何気なく車で通過してしまうが、菜の花やレンゲソウの咲く頃、春風に吹かれながらゆっくり歩いてもらいたいコースである。

このマップで注目している五社。弘法大師が仁井田大明神の境内の五つの社にそれぞれ本地仏を祀り、神仏習合の福円満寺を創建し四国霊場の札所として開いたという。以来千年の間、数多の巡礼が祈りを込めて歩き続けてきた道である。そして廃仏毀釈の暴挙により、福円満寺から岩本寺へ札所が移転している。八十八カ所の中で唯一、五つのご本尊を祀る岩本寺のルーツはここにあることを体感することができる。さらにさかのぼれば五在所森伝説にもつながっている。

五社の聖域の中で目を引くのが、中宮に隣接した「兒安花（こやすはな）神社」木花之咲耶姫を祀る子どもの健やかな成長を願う神社。ぬいぐるみがたくさん奉納されとてもほのぼのとして愛らしい。また、三の宮境内の狛犬のユニークさ、明治時代の大洪水の碑、森ノ宮の長い石段も見どころだ。そんな五社の最大のイベントが 11 月 15 日の秋の大祭。権七の大太刀や銅鉾が披露され、五つの神社から神様方が集まり盛大な御輿行列が催され、流鏑馬の妙技も奉納される。

高岡神社の秋季大祭。御旅所に着いた５つの神輿


巡礼の道
五社街道てくてくまっぷ
お問い合わせ先
四万十町商工観光課
0880−22−3281
しまんと町地域振興創造協議会
四万十町観光協会
0880−22−0457
0880−29−6004
五社拡大図
五社
高岡神社
仁井田川
宝川駅
岩本寺
金剛福寺

４、大正中津川ふるさとマップ

農山村の原風景

四万十町田野々と梼原町松原のまんなかあたり。日本人に「日本の農山村の原風景は？」と問えば、多くの人が思い描く静止画がこの中津川の風景であるといえる。急峻な奥四万十の山々に囲まれ、河岸段丘に営まれている田畑や家並み。長い年月をかけて人の営みと自然がつくりあげてきた中津川は、文化庁が「四万十川文化的景観の里」として選定している。

この里のほのぼのとした空気とのどかに流れる時間。そして温もりのある中津川の人たち。腕時計を外して、携帯電話の電源を切って、自然の時間に身を任せてありのままに歩いて、人や自然や文化にふれあってもらいたい集落である。

この作品は、中津川の拠り所である農家民宿「はこば」の田辺壮市さん・客子さんご夫妻から声をかけてもらったことがきっかけである。

コンパクトに丸くまとまった感じの中津川集落には数々の物語がある。集落を通る車道は森林軌道の跡を道路に改良したものであり、清流中津川の淵にはそれぞれ名前が付けられ、古来より人々に親しまれて、人が川と共生していたもっと濃い時代のことに思いをはせることができる。中津川のシンボルと言えば「久木の森　中津川風景林」。森林と清流が溶け合って、えもいわれぬ快感に浸ることができる。百聞は一見にしかずであるが、ここの空気を生でぜひ堪能してもらいたい。

芸術的にも見ることができる石垣、そして石段。100 数年前の日露戦争従軍者の名前が刻まれた「征露紀念碑」。平和なこの里からも戦地へ招集された若者とその家族がいたことを忘れてはいけない。明治維新以降、今の日本は戦争の道を片道切符で突っ走ってきた歴史を点検し、決して繰り返してはならないことを誓わなければならない。

農家民宿「はこば」。「はこば」の響きが耳に心地よい。「はこば」は「箱場」。現代のポスト。サワタリ橋を渡り茶堂前を通り、幅の広い山道に乗ると大奈路の矢立を結ぶ「矢立往還」だ。「矢立」は筆と墨壺を入れて携帯する道具。この山道を手紙が行き来していたことの証の地名。生活に根ざした地名がいつまでも残ってもらいたいし、後世に引き継いでいく責任が今を生きる私たちにはあると思う。

隣の津野山郷には茶堂が数多く現存している。茶堂は集落に来る者を迎え、去る者を見送る。山に閉ざされた山間部では、遠くから来る旅人は物資や情報をもたらす福の神。茶菓を接待して迎え、送った。逆に「怪しい者」であれば茶堂で警戒して人身を見極めていた。そんな茶堂に腰掛けて文化的景観の里を眺めてみたい。

春には四万十街道ひな祭り、夏にはどろんこ運動会、秋には紅葉祭。住む人々の明るさ、力強さ、他所から来る者を受け入れるおおらかさ。これからも中津川の人々は、この里を守り、磨き、未来へとつないでいくに違いない。　（森下）

大正中津川集落

四万十川文化的景観の里
大正中津川ふるさとMAP
日本の原風景のひとつとして思い浮かべる
なつかしい農山村の景色がここにはあります。
椿原川の支流、中津川川の上流山間部。
急峻な山々に囲まれた段丘に広がる集落や田畑。
長い月日をかけて人の営みと自然がつくりあげてきた
文化的景観が広がっています。
"なんとなくほっとする"そんなほのぼのとした雰囲気の中を
自然や人や文化にふれながらゆっくりと歩いてみませんか。
河内神社
森然とした中に鎮座まします
河内神社。厚く祈り、神に
祈りを捧げる。
どろんこ運動会
森ヶ内へ
四万十川をさかのぼる
二十と余里の水上に
五十の人家がうちつづく
これぞ北ヶ里
中津川
(中津川小学校校歌)
四万十川
ひなまつり
茶堂
かつて、土佐大奈路や椿川
下津井街道を結ぶ運搬路
につながる生活道。
ゆっくり歩いて人と
文化や本当の
豊かさにふれて
みませんか。
久木人森風景林
多種多様な広葉樹が
渓谷沿いに広がる。
苔むす斜面
久木の森
東屋
ゆっくり歩けば心がなごむ。
川のせせらぎと森の風に
癒しながら歩いてみたい。
清水周辺の主な淵
① よこ淵
② へらいて淵
③ がま淵
④ ひら淵
⑤ せっとこ淵
⑥ ほばしら淵
⑦ つっげけ淵
⑧ たぬき淵
⑨ よせわらの淵
⑩ 乙ぼこの淵
⑪ ぎんだこの淵
⑫ はかま淵
⑬ おかばし淵
⑭ へんろ淵
森のステージ
久木の石垣
大橋
古い石垣
文面を全お尻貌さま
中津川トンネル
○森林軌道 たった道路
明治時代、小松尾山からの
木材搬出の為に、大奈路まで
18kmに森林軌道が開設
された。
中津川沿いに緩やかな
勾配で伸びている。
大正大奈路へ
もみじ祭
森のバイキングが
サイコウに楽しい!!
森のけん
中津川にまっさきに春を告げる桜
戎川
深川・拝合への山道
学校や営林署の
製品事業所や組合員もも
ありとてもにぎわっていた。
みごとな
石段がある
慰霊の碑
従軍記念碑
豊後民宿
「はこば」
はこばとは昔の
郵便を表はす
家号。
サワタリ橋
白鳥学校
製材
昔
今
長曾北部の時代
から木材の産地。
百年から林業が
盛んな地域。
●地域みんなでつくる
多彩な催し!!
春には四万十街道みなまつりと
びんびん祭り。夏にはどろんこ祭り
秋にはもみじ祭りのイベントが
開かれます。
地域全体が国の重要文化的
景観に指定されています。
恵まれる自然の中で、中津川を
元気にしていこうと地域みんなが
力を合わせて楽しみながら遊び
いっぱいで、懸命に盛り上げて
います。